
ふぁいなるクエスト！

高嶋ナカノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふぁいなるクエスト！

【Nコード】

N3456Y

【作者名】

高嶋ナカノ

【あらすじ】

ある朝、ミナミンの枕元にいきなり現れた、女神アルテシア。彼女曰く、ミナミンこそが魔王パイチャンを倒す勇者だというのである！！しかし勇者ミナミンはぐうたら無職、ニートでダメ人間、ヤル気とはまるつきし無縁の世界の男なのであった！！女神アルテシアは勇者ミナミンのケツを叩いて魔王パイチャンを倒し、無事に世界の平和を取り戻せるのか的、ゆるゆる展開のダメダメギャグファンタジー！！

（※1 この話はほぼ全編、ほとんどが台詞文章です。ブログやチャットログ感覚で書かれていますので、横

書き読みを推奨します。顔文字などもありますので、苦手な方は回避をお願いいたします）（※2 たまに挿絵があります。挿絵表示をONにしておいていただけると嬉しいです）

1話「夜明け前の勇者。」

>i34931—4402<

女神「起きなさい……勇者ミナミンよ……」

勇者「ンガゝスピヨピヨ……ムニヤムニヤ……もう食べられない……」

女神「お約束チックな寝言を言っていないで、目を覚めますので……」

勇者「こらあ。逃げちゃダメだろう。ヨーコも、ユキコも、マリリンもみんな俺のものだあ。満腹だけどやっぱりみんな食べちゃううゝグエツヘツヘツ……」

女神「Σ（ロ、――） 食べるって女の方ツ？ しかもお腹いっぱいとかいってるし！！連載開始早々ど淫夢ツ？ ええい、起きなさいというに――！！！！」

女神アルテシアは勇者ミナミンが寝ているベッドをひっくり返した！
ドギヤバキめしよドンガラガッシャーン！！！！

（ノー”ー”ノ　⌞　。・・）

勇者ミナミンは床に頭をぶつけて、10のダメージを受けた！

勇者「、（#。D。）ノ ゴルア！！誰じゃい、俺様のことを派手に暗殺しようとするフトドキ者わー！！」

女神「派手に暗殺って言葉として変でしょ！それから私は暗殺目的でやってきたわけではありません！」

勇者「じゃあ強盗？お金なんかないよ。だって俺様無職だモンツ★（キラッ）」

女神「（D。？） 強盗ではありません！それから威張れることじゃないでしょっ。」

勇者「i i — l i （Φ D Φ；） i i — l i ってことは、よ……夜這い？ 俺様もしかして貞操の危機真っ只中ツ？」

女神「、（#。D。）ノ もっと違いますッ！！私の名はアルテシア。私は貴方に勇者として、世界を平和に導くために、私と共に魔王と戦ってほしいのです！！」

勇者「なあんだ。宗教の勧誘だったのか。すいませ〜ん。俺様の宗教は巨人なんでえ、新聞は読売とることに決定してるんで結構ですう。」

女神「宗教でもないし、新聞の勧誘でもないし、ましてや強盗でも夜這いでもありませんッ！！」

勇者「ぐ~~~~~~~~。+。*。」

女神「Σ（D。；） いやだから寝ないでくださいってばッ！！」

勇者「（ガバツと起き上がって）つかね！！非常識！！夜這いでも強盗でも宗教勧誘でも巨人ファンでもない分際で、こんな夜中に勝手にひとんちあがりこんで、勇者になれとか魔王を倒せとか、とってもすっごく非常識！！そんなわけで、俺様寝るから！！おやすみグツナイ！！ばたんきゅう。」

女神「非常識なのは謝ります！けれど時間がないのです。魔王ピイチャン悪の手は、すぐそこまで……って全然聞いてないし……。だめだわ……。完全に爆睡してる……。明日の朝、出直してこよう……。めそめそ。」

こうして勇者ミナミンは、女神アルテシアの誘いを、初回から見事にナイガシロにしたのであった。

がんばれ、女神アルテシア！！
負けるな、女神アルテシア！！

世界の未来は、勇者ミナミンではなく、君の手にかかっている！！

続く。

2話「勇者、目覚める。」

勇者ミナミンは自分の部屋の温かいベッドの中で、うつすらと目を開き、窓の外の空を見あげた。
レースのカーテンごしから差し込む光は明るく、空は晴れ渡っている。

勇者「おお、なんていい天気なんだ。こんな日はゆっくり昼寝でもするに限るな！ってなわけで、おやすみなさ〜い。ぐ〜。」

ドンガラガツシャンぷげぽによめっしや〜ん。
、(#。D。ノ「」(ノ、D、)ノ

女神「あなたッ！！どっつつんだけ寝る気なんですかッ！」

勇者「誰じゃい、俺様の安眠を邪魔する奴わ！！」

女神「ゝ(*、D、*)ノ”彡☆ もう完全に昼なんですよ！おまけにこれから昼寝だなんて！！いつまで待たせる気なの！！！！」

勇者「俺様、朝寝して・夜寝するまで昼寝して・時々起きて居眠りをする算段！！」

女神「いっそ永眠してしまいなさい！！」

勇者「イエッス★アイアイサー!ぐぐ。」

ばきメシヤごきぐきポギョーン!!

εε|| || || || ≡ゝ、(#、∩)っ「L」(ウラアアア)(ゝ、
□)(ゝ)

勇者「(「、口;)」 なにしやがる!!!!暴力反対!!!!」

女神「(メ≧皿≦) || 3 いいから起きなさいというのに!!」

勇者「永眠しろだとか起きろだとか、どっちだよ!!つつーか、ア
ンタ誰?」

女神「だから!!女神アルテシアですッ!!昨晚も名乗ったでしょ
っ!」

勇者「お前、何でそんないかにもファンタジーですゝみたいなズル
ズル長い衣装着てんの?髪もやたら長いし。歩くの邪魔じゃね?」

女神「だから私は女神なんですってば!天界の住民だから、服も人
間界のデザインとは違うものなんです!ほら、私の背中に翼がある
でしょ!(くるりと後ろを向く)」

勇者「あ・ホントだ。でも、そんなちっこい翼ついてても、意味ね
えじゃん。」

女神「空を飛んだりする時には、大きく広げることが出来るのです
よ。」

勇者「収納可能なんだ。へえ、便利だな。……で？その女神様が、人間界・忒本国・北魁道県・薩幌市在住の20歳無職、好きなもの巨人、集めてるものエロ本という俺様に、一体何の用事だ？」

女神「それも昨日から言ってるでしょっ！魔界の王ピーチャンが世界を闇に沈めようと企んでいるとの予言が出たのです。ですから勇者ミナミン、貴方の力を借りに来たんですよ！」

勇者「（ピ・ポ・パ）あゝもしもし。警察つかう？俺様、ごく普通の平凡な無職の一般市民なんすけど。なんか頭のおかしい痴女が、俺様の芳しき汚部屋（※長年開けてなかった押入れのすみっこみたいな臭いが充満）に押し掛けてきてんすよね！」

女神アルテシアは勇者ミナミンの携帯電話をひったくる。

女神「（笑顔で）あ・警察の方ですか？すみませう。今の間違い電話です。頭がおかしい変態は今の男性のほうなので、どうぞお気になさらず。ピッ。（切）」

勇者「（「、口、」）誰が頭がおかしい変態じゃっ！！」

女神「（メ≧皿≦）||3 そっちこそ、誰が頭のおかしい痴女ですかッ……！」

勇者「（、ε、）朝っぱらからやってきて、初対面のパンピーを勇者よばわりする女は変態でえっす！！（断言）」

女神「い、い、い、(T▽T)い、い、い、ううう……こんなアホに、変態呼ばわりされるだなんて…。」

勇者「つつーかね！魔王倒せとか無理！俺様、自慢じゃないが、金も根性も実力もないざんす！（どーんと胸をはる）」

女神「本当に自慢にならないわね…。けれど、勇者ミナミン、あなたしか魔王を倒すことはできないのです。」

勇者「(||A||;) 何故にッ？」

女神「あなたの家は代々勇者の家系でしょう。」

勇者「あゝなんかそゝらしゝねゝ。うちの母ちゃんが言ってたわ、うちのハゲオヤジは昔、聖剣エクスカリバーを使える勇者だったとか何とか。」

女神「ええ、この家には代々『聖剣エクスカリバー』が伝わっているはずです。そして、ミナミン、あなたは勇者家直系、唯一の男子。聖剣エクスカリバーは直系男子が20歳になると、自動的にその人物に継承され、他の人物は例え先代の勇者であろうとも、一切その聖なる力を発揮することが出来なくなってしまうのです。そして、聖剣エクスカリバーでなければ、闇の魔王を倒すことはできません。」

勇者「うゝゝ。何か仏間にある床の間に、やたらゴツくて派手な剣が偉そうに飾ってるあるなゝって、前から不思議に思ってたはいたけれどもさゝ。アレ、そんなメンドクサイもんだったのかよゝ。」

女神「とりあえず私は『聖剣エクスカリバー』に用事があるのだけ

れど…。」

勇者「Σ（「Δ」；）　にやんですとう？」

女神「エクスカリバーは今、どこにあるのかしら？（部屋の中をキョロキョロ）」

勇者「（…；；▽；…；…）　えゝ…その件についてですがアゝ…諸事情とかがありましてゝもう、この家にはないのでございまするゝ。（遠い目）」

女神「Σ（——。Δ。　ええっ？諸事情って何ですかっ？どういうことっ？きちんと説明してくださいっ！」

2話目にして、伝説の聖剣をさっさと紛失したらしい勇者ミナミン。魔王ピイチャン打倒の道を阻む、急転直下の大事件がいきなり勃発ッ？

聖剣エクスカリバーの行方はいかにッ？

続くっ。

3話「聖剣エクスカリバーの行方。」

女神「Σ（――。Δ。） 聖剣エクスカリバーがここにはないって、一体どういうことですか？あの聖剣は、あなたの家でもあるナカノ家に代々伝わっている家宝のはずですよっ！」

勇者「。＋。・・ヾ（＊・ω・）シ・・。＋。 いやまあ、そーなんですけどお。色々あってエ、ついどっか行っちゃったってゆうかあゝ。」

女神「女子高生口調で言い訳してないで、ちゃんと答えてくださいっ！聖剣はどうなったのっ？」

勇者「（遠い目をしながら回想開始）そう……あれは卑怯な畏だったのだ……。」

女神「畏にハメられて、聖剣を奪われてしまったってことですかっ？」

勇者「ハイ。その通りにございます。（何故かとても殊勝な態度）」

女神「何としても聖剣を取り戻さなければ、世界は魔王ピイチャンの手に落ちてしまう……！一体、どんな敵に奪われたのですかっ？」

勇者「えー……あれはかれこれ1週間ほど前のこと……。近所に住んでる友達の、ハラと、ハルユキと、ゴンちゃんの3人で、雀荘に入りましたですな……。」

女神「……………今、皆まで言わずともオチ見えたんですが

…。まさか賭け麻雀で負けて、スカンピンになり、借金代わりに聖剣エクスカリバーを渡したりとかしてないでしょうね…。」

勇者「ゝ(＊、ヅ＊)ノ”多☆ 違うんだ！あれは俺様、ハメられたんだ！！ゴンちゃんときたら、超大技・国士無双を出しやがったんですよ！！ありえん！！あれは詐欺だ！！間違いねえ！！確信をもって断言するッ！！！」

女神「、(#。ヅ。)ノ」ガッ？(ノ、ヅ)ノ」

勇者「・。(Pヅ、q。)・。痛いッ！暴力反対！！！」

女神「(、ヅ)」ハメられたかどーかは知ったこっちゃありませんよ！つまり、聖剣エクスカリバーはゴンちゃんという方のおうちにあるのねッ？」

勇者「ういうゝい。」

女神「一刻も早く取り戻さないと！もし聖剣が魔王の手に渡ってしまったら、世界が終わってしまうわ！行きますよ、勇者ミナミン！ゴンちゃんのうちへ！！！」

勇者「えゝ。(不満げ)朝ごはん食べてからでいゝいゝ？あと、俺様、うんこしたいゝ。」

女神「えゝじゃありません！！つか、朝ごはんも何も、もう昼ですッ！うんこしたら、今すぐ行きますよッ！」

勇者「へいへい。」

勇者を卑劣な罠（笑）に嵌め、聖剣を奪ったのは、ゴンちゃんという男らしい！

女神アルテシアと、勇者ミナミンは、無事聖剣を取り戻すことが出来るのだろうか？

続く。

4話「親切ゴンちゃん。」

ゴンちゃん宅に到着し、家の前に佇む二人。

女神アルテシアは、おんぼろ木造建築2階建ての家屋を見上げた。

女神「ここですね…ゴンちゃんのおうちは。ここに聖剣エクスカリバーがあるのですねっ？」

勇者「た…たぶん…。（自信なさげ）」

女神「（「ㄥ」？） たぶんじゃありませんッ！聖剣を取り戻さないで、魔王パイチャンを倒せないですよっ！」

勇者「賭け麻雀で負けたカタに聖剣取られちゃったからなァ…。ゴンちゃん、タダで返してくれっかなあ…。俺様、只今、一銭も持っていないぜよ。」

女神「とにかくゴンちゃんに会ってみましょう。こゝんにちわっ！！！」

パタンとドアが開く。

ゴン「誰じゃい、こんな朝っぱらから玄関先でデカイ声を出すのわ！！
w（「△」；）w」

女神「すいません…もう午後なんですけど…。しかも髪の毛にバ

ツチリ寝ぐせついてるし……。って、ちよっと、勇者ミナミン！あな
たの友達、みんなこんなだらない生活習慣の人たちばかりなのっ
？」

勇者「ウイ。おおむね夜行性の連中ばかりなのであった。」

ゴン「おう、なんだミナミンじゃねえか！どうしたい、何か用か？
ところで誰なんだ、このイカれたズルズルのコスプレをした、長い
髪の毛えちゃんは。もしかして、デリバリー売春で3Pのお誘いッ
？」

女神「い、い、い、（T∇T）い、い、い、1話で登場した時、淫夢見てた勇者といい、このゴンちゃんといい、食う・寝る・ヤル。しか脳みそに入っていないのかしら……。類友……類友だわ……。（溜息）」

勇者「いやいや、ゴンちゃんよ。残念ながら今日の俺様、3Pのお誘いではないのだ。こないだ俺様、ゴンちゃんに聖剣あげちゃったじゃん？」

ゴン「ああ、あの家宝だったとかいう剣か！」

女神「（ノ。□。）ノ　そうです、それですっ！今、どこにあるのですかっ？私達には、聖剣が必要なのですっ！」

ゴン「（申し訳なさそうな顔をして頭をぽりぽりかく）いや……それがよお……」

女神「（…；。；Δ，。；…） まさか、もう悪の手先に獲られてしまったとか、売ってしまったとかっ？」

ゴン「いやいや、ちゃんとうちにはあるぜ。まあ、確かにあれは俺が麻雀で勝って賞品代わりにもらったもんだけどさ。けど元は友達のもんだし、いつか返して欲しいなんて話になるかと思って、手元に置いておいたんだ。つーか、俺が持っても使い道ねえし。」

女神「・。・。(ノ、＼)・。・ あ……ありがとうございますうう！！！！(感涙) さっき類友とか罵って申し訳ありませんでしたっ！勇者ミナミン、あなたはいいお友達をお持ちなのねっ！！」

勇者「(㇗、?) ゲンキな女だな、オイ。」

ゴン「それがなあ……礼を言うのは、まだ早いと思うぜ。まあ、百聞は一見にしかずだ。とりあえず、2人とも、立ち話も何だから、うちの中に入れよ。」

勇者ミナミンの友達の割には、ゴンちゃんは案外マトモな人(ちょっとお寝坊さんなのが玉に傷★)だったようだ。

聖剣エクスカリバーも、どうやら無事だったらしい。

だが、ゴンちゃんの煮え切らない様子からして、どうやら聖剣に何か異変がっ？

どうした、聖剣！！

どうなる、世界！！

まだまだ勇者ミナミンと、女神アルテシアの旅は始まったばかりだ！！

続く。

5話「恐怖の漬物ババア。」

ゴン「とりあえず、2人とも、立ち話も何だから、うちの中に入れてよ。」

勇者「（――） うーい。おっじゃましまーっす。」

女神「聖剣エクスカリバーはちゃんとあるのかしら…？（どきどき）」

ゴン「おーい。ばあちゃーん！」

ゴンちゃんが奥の台所に向かって叫ぶと、腰の曲がったしわくちやの老婆がよたよたと出てくる。

勇者「（O、▽、）／ ういーす。ばーちゃん、お久しぶりー！まだ死んでなかったのか！」

老婆「かかかかか。あたしゃまだまだ若いよ。たったの92歳だよ。」

女神「（＊、ω、＊） まあ、お元気でいらっしやいますこと。」

老婆「おんやまあ、よく見たら、おめえさん、饅頭屋のミナミンくんでねがー。んまア立派になっ…てないのう。ちっとも。」

勇者「（ハ、Δ、？） 社交辞令ぐらいサービスで言わんかい、ク

ソババア。」

老婆「隣の子は嫁さんかい。あらまア別嬪さんだところ。なんじやいなんじやい、うまいことやりおって〜！イヒヒヒヒ。」

女神「（＊、ω、）　いいえッ、決してッ！！断じて嫁などではございません。おばあさまッ！！」

老婆「んだども、ちょっとケツが小さいんでねが？　もっとう、おなこのケツはボーンとしてねえと、元気な赤ちゃんは産めねえど！」

女神「Σ（〃、∩、〃）　ケ：ケツ？　いえだから、私は嫁などでは……」

老婆「かかかかか。あたしゃまだまだ若いよ。たったの92歳だよ★」

女神「……………」

ゴン「すまん、ねえちゃん。うちのばあちゃん、耳が遠いんだ。ちよっぴり認知症も入ってるし。」

老婆「、（＃、∩、）っ　誰が耳が遠くて、認知症が入ってるってッ？　あたしゃまだ、たったの92歳だよ！！！！」

勇者「うゝん、相変わらず都合よくタチの悪いババアだ。こういうババアに限って長生きだけはするからな。」

女神「ババ……いえ、おばあさまの件はおいておくとして、ゴン様、

聖剣エクスカリバーはどこにあるのでしょうか？」

ゴン「……いや、え〜とな…台所にあることにはあるんだけど…。」

ゴンちゃんは申し訳なさそうな顔をしながら、台所の隅を指差した。そこには、大きな瓶が置いてある。

勇者「何だ？この大瓶？」

老婆「ああ、それはアタシが漬けているヌカミソ漬けの瓶さ。ヌカミソってのは、大変でなア。毎日こうして掻き混ぜなきゃならんのだよ〜。」

ババアは瓶の蓋を開けると、隣に置いてあった聖剣エクスカリバーでヌカミソをぐっちゃぐちゃとかき混ぜ……

勇者「Σ（ロ、lll）　　って！！ババア————！！！！ちよつと待ったアアアア！！！！！」

老婆「なんじゃい、いきなり大声出して。（どぷっ。ぐりぐりぐり。孫のゴンが持って帰ってきたこの棒、ヌカミソ混ぜるのに丁度良い長さで幅でう。お〜今日も芳しい良い香りがするぞえ〜。」

女神「い、い、（T▽T）い、い、　ああああああ〜。」

ゴン「（へーへ〜）　　ばあちゃん。悪いんだけどそれ、ヌカミソ混

ぜ器じゃねんだとよ。元々ミナミンの持ち物で、返してやりたいんだ。ばあちゃんにはまた、俺がちょうどいい長さのヘラを買ってやるよ。100均で。」

老婆「ありゃまあ、そうだったのかい。どおりでちよつと重たいと思っておったんじゃ。ほれ、持ってけ、ミナミンちゃん。」

勇者「（「、口、」）「 臭ッ！！超ヌカミソ臭ッッッッッ！！」

聖剣エクスカリバーは無事だった……が、別の意味ちつとも無事ではなかった！

勇者御一行様はヌカミソ臭くなった聖剣エクスカリバーで、果たして魔王を倒すことが出来るのであろうかッ？

魔王もいい迷惑だ！！

続く。

6話「新たな聖剣！（ビニール袋入り）」

勇者ミナミンと女神アルテシアは、聖剣エクスカリバーにこびりついたヌカミソを落とすため、ゴンちゃん宅の風呂場を借りることにした。

女神「（ごしごしごしごし）うううう……ヌカミソは落ちたけど、匂いが消えない……いいいい！！」

勇者「（くんくんくん）うっわーホントだ……くっさ……いい！！いやーん！！」

女神「Ⅲ（Ⅱ。Ⅲ。Ⅲ）乙女の真似しながら、他人事のように言わないでくださいよ！！もとはといえば、あなたが麻雀で負けて聖剣をゴンちゃんに獲られてしまったから、こんなことになってしまったんですよ！」

勇者「（；w；）ううう……そうだった……。反省。しょぼん。」

女神「Σ（´・ω・lll）えっ？いきなり素直な態度？いえいえ、一応ヌカミソの匂いが染み付いてしまった以外は聖剣は無事だったんですし、そんなに落ち込むことは……」

勇者「チキショウ、あそこで俺様があの牌を捨てずにいれば、ゴンちゃんに勝っていたものを！！悔やんでも悔やみきれぬ！！きつと次こそは勝あつ！！（決意）」

女神「（—Δ—；）……反省って、麻雀に負けたことに対する反

省の方ですか……。ていうか、全く反省してませんね、ミナミン…。」

勇者「で・さゝあ。これからどーすんの？ まさかその聖剣持ち歩けとか言わないよネ？」

女神「（、＼＼＼＼＼＼） 持ち歩かないで、どうやって魔王ピイチャンを倒す気なんですかつ！」

勇者「いやだってその聖剣、持ち歩いたが最後、別の意味でこの街の勇者になっちまうぞ！！」

女神「、、、、（T▽T）、、、、 そうなんですよねえ。問題はそこなんです。こんなヌカミソ聖剣では、魔王に辿り着く前に、世間の笑いものになってしまわ…。」

勇者「Σ（；、、、D・、） そうだっ！！俺様、いいこと思いついた！！（勇者ミナミンの頭上に、豆電球がピコーンと灯る）」

女神「。+。（・＼・）。+。 えっ？何かいい案でもっ？」

勇者「今日からこの聖剣の名前は、エクスカリバーではなく、『聖剣ヌカミソード』と呼ぼう！！！！」

女神「Ⅲ（。D。Ⅲ） 名前が状況にピッタリ適確になってしまったというだけで、問題は何一つ解決してないじゃないですか——！！！！」

勇者「..+。（（＊。▽。）（。☆ よく伝説の剣って斬ったら炎が出るとか、凍りつくとか、連動して魔力効果あったりする

べ？ 斬ったらヌカミソ臭がこびりつく聖剣、今、ここに誕生！
むしろ積極的にもっとたくさんヌカミソを塗ったくつとくべき！！
（何かとっても素晴らしいことを考えついた的、誇らしげな表情）

女神「（「、口、；」）」 どんだけ無駄な方向にポジティブなんですか！ 斬った敵がヌカミソ臭に悶える前に、常時持ち歩いている私たちの方が、臭気にあてられて悶絶死してしまいますよ！」

風呂場のドアがパタッと開いて、ゴンちゃんが顔を出す。

ゴン「おう、どうだ？ヌカミソは落ちたか？」

女神「・・（P、q）・・ 臭いが全然落ちないんですううゝ！こんな凄まじい臭いが染み付いた聖剣持ち歩いて、魔王ピイチャンのところになんて行けないゝいい！！うわゝん！！」

ゴン「そうじゃないかと思ってよ。ほれ。」

勇者「（。・、） あ、透明なビニール袋だ。」

ゴン「d（ゝω・＊） これに入れて歩けば、とりあえず匂いは防げるだろ。」

勇者「おう、サンキュー！助かるわ！」

女神「・・（P、q）・・ 聖剣をビニール袋に入れたまま、魔王を倒しに行く勇者なんて聞いたことないゝゝ！！カッコ悪すぎますうううゝ！！ うわぁん！！」

勇者「ゴチャゴチャ五月蠅い女だなく。もうヌカミソードになっちまったもんは仕方ないだろうが！」

女神「。。。(ノ、口、)。。 あああああ、もう名前がすっかりヌカミソードで定着しちゃっているうううう!!」

勇者「じゃあな、ゴンちゃん。色々世話になったな。そろそろ俺様たち、魔王退治に出かけるわ。」

ゴン「おう。ま、ほどほどに頑張れよう！」

こうして新たな名前となった聖剣ヌカミソード（ビニール袋入り）を携え、女神アルテシアと勇者ミナミンの伝説の旅が、よ・う・や・く始まったのだった！

果たして勇者ミナミンと女神アルテシアは魔王ピイチャンを倒せるのだろうか？

っていうか、そもそもこんな調子で、魔王ピイチャンのところまで辿り着けるのだろうか？

ぐうたらニートだった勇者ミナミン、そもそも魔王のところに行く気があるのかどうかすら怪しいぞ！

頑張れ、女神アルテシア！

君の苦労はまだまだ始まったばかりだ!!

続く。

7話「パチンコ屋と魔王の因果関係についての考察。」

女神「さて。無事……じゃありませんけど、どうにか聖剣エクスカリバーも取り戻したことだし、魔王を倒すためには、我々の他にも仲間が必要ですよね。」

勇者「げっ、うっそ！マジで魔王討伐に行くの？俺様もっ？」

女神「（「ん」？） 7話まできてるのに、この話の存在意義ですらある超基本初期設定にツッコミ入れないでもらえます…？」

勇者「えゝいやゝん。行きたくなあいいいいゝ。俺様、おうちでネトゲしなきゃなんないしい。」

女神「ある意味、魔王討伐は人生と世界を賭けた大ゲームじゃないですか。」

勇者「チツチツチツ。わかってないな。ゲームっていうのは、自分が傷つかないからこそやって楽しいわけよ。大きな代償を伴う戦いは楽しめないし、だったらやる意味すらないの！おわかり？」

女神「ゲームに関してのあなたの意見はよく判りましたが、魔王討伐をやる意味がないという点に関しては賛同しかねます。別にあなたの意見は聞いてませんからっ。」

勇者「（メ≧皿≦） 3 ギャー！！強制イベント発動とは、横暴ナリ——！！——」

女神「……で。魔王を倒すために協力してくれるような、ちゃんと

した仲間を探さなければならぬわけですが。(スルー)」

勇者「！、、、(T▽T)！、、、うううう……さすがは強制イベントだ……。俺様の意思に関係なく、ずんどこ話が進んでゆく……。」

女神「まずミナミンが聖剣を持つ剣士でしょ。私は白魔法を使えますから、後は黒魔導士や召喚士など、攻撃系魔法使いと、武闘家・騎士あたりに分類されるような体力のある方が欲しいですね。」

勇者「うむ。スロットの達人や、パチスロファイター、冬ソナ機コンプリーターなども欲しいところだな。(神妙な顔つきで検討に参加)」

女神「遊び人(ひと括り)は不要ですッ！てか、パチンコ屋に魔王はいません……！」

勇者「Σ(。△。;)　ば……馬鹿なッ！！魔王ともあろう者が、パチンコ屋に通っておらぬとわ！！童貞を死守するよりも愚かで恥ずべき行為じゃないか……！」

女神「魔王ともあろう者がパチンコ屋通い必須って……ミナミン、あなた、どうでもいいところで魔王の存在を買いかぶってませんか……。ああ、もう、あなたと話をしていると、どんどん本筋から逸れていってしまうわ。とにかく仲間よ仲間！ミナミンの知り合いに、パチンコ通いをしていない、真面目な黒魔導士や騎士はいないの？」

勇者「ㄣ(。A。ㄣ)」　黒魔導士や騎士だとかいう以前に、この俺様の知り合いで真面目なヤツなぞ一人もおらぬわ！！ましてや、パチンコ通いしてない愚か者になぞ、知り合う機会があるはずがない……！ふはははは……！」

女神「(T皿T) 何故、そこで威張れるのが、さっぱり理解できません…。」

勇者「おお、そうだ！(手をぽん)パチンコ屋以外で、黒魔導士や騎士をナンパできそうな場所には心当たりがあるぞ！」

女神「(・。・。；) えっ、本当にっ？どこですか、そこはっ！」

勇者「ズバリ、そこは『酒場』でっす！！世界の悪を倒すため仲間を求める志の高い連中が集う定番の場所、それは酒場！！もう、酒場に行くっきゃない！！」

女神「(＊'▽'＊)ノ。+。＊。 まあ、人間界にはそんな便利でポジティブな集いの場があるのね？素晴らしいわ！早速そこに行きましょう！」

勇者「、(<▽>)ノ ちょうどいい具合に、陽も暮れてきたし、腹も減ったことだしな！よっしゃ、酒場ヘレッツゴー！！」

かくて、勇者ミナミンと女神アルテシアは、仲間を求めて町の酒場へ行くことにしたのだった。

だが普通、酒場ににいるのは黒魔導士や騎士ではなく、ただの酔っ払いだ！！

しかもどう考えても、勇者ミナミンは飲み代を持っていないぞ！！騙されるな、女神アルテシア！！

毎回ピンチ続きまくりだ、どうなる勇者御一行様ツ！？

続く。

8話「仲間探し(の、はず) i n 酒場。」

勇者「さあ着いたぞ！この酒場の名前は、『つぼ九』というのだ！」

女神「では、このお店の中に魔王ピイちゃんを一緒に倒してくれそうな、魔法使いや剣士の方がいらっしやるのですね！」

勇者「。＋・（・▽・）。＋・。おーいるいる、絶対いる！太鼓判を大盤振る舞いものっそいウジャウジャたむろってること、もう間違いなし！」

女神「（＊、ω、＊）まあ。下界にはなんて頼もしい場所があるのかしら。ここで仲間を集めれば、魔王ピイちゃんを倒しに行くことができますね。さっそく中へ入りましょう！」

>i34948—4402<

店員「ラッシャッヤッセー！3名様ですかア？」

勇者「……ん？3名？俺様とアルテシアしかないな……」

ミナミンが後ろを振り返ると、背後には……

勇者「ΣΣ」（———、□———；；）「ギャヒイイイ！！
！ミイラが俺様の背中にくっついてるうううう！！！」

女神「（。Д。；；；。Д。）キャー！！………って、ちよっ

と待ってください、勇者ミナミン！ミイラではありません。見た目はミイラに果てしなく近いですが、その方はきちんと生きていらっしゃるみたいですよ。」

ミイラ「ふっひょっひょっひょっ！ミイラとは失礼な連中じゃな！」

女神「おじいさん、連れのミナミンが、失礼なことを言ってしまったて、申し訳ありません。」

勇者「（――） いや……お前だつてさっき、『見た目はミイラに果てしなく近い』とか、凄い失礼なこと言つてたぞ……」

女神「（コホンと咳払い）で、おじいさん、どうなさつたのですか？私達に何か御用でしょうか。」

実は生きてたミイラじじい「お主ら、さきほど、魔王ピイチャンを倒すとか何とかゆーとらんかったかの？」

女神「ええ。私達は魔王ピイチャンを倒すべく、仲間を探している最中なのです。」

突然、ミイラじじいの両目から大粒の涙が、鼻からは鼻水が溢れ出した。

勇者「ギャッ。汚ねッ！（ぐぐ）」

ミイラじじい「（おうおうと泣く）やっと……やっと、魔王を倒すという若者に出会えた！苦節30年、ここで待っていた甲斐があった

というものじゃ!!やはり志の高い若者は酒場に集うという、人間の話は本当だったのじゃな!」

勇者「アホか!!志の高い若者が居酒屋なんかにいるかつ!酒場に
いるのは普通、ただの酔っ払いばかりだ!!」

女神「Σ(￣ロ、lll) ……えっ?」

勇者「えゝごほんごほん。で、アルテシアちゃん。魔王30年放置
プレイでも、世の中平和なんだから、別にあと300年ぐらいほつ
たらかしといても、世界は平和なままなんじゃないかね?」

女神「(溜息)それがねえ……神界も最初はそう思っていて、魔王
ピイチャンが誕生したのは知っていたけれど、実害あるわけじゃな
しってんで対策はうたなかったんですよね。それが最近になってか
ら、魔王ピイチャンったら急にヤル気を出してきたみたいで、神界
に対して挑戦状とか、テロ予告とか、卑猥な写メ画像とかを、ばん
ばん送りつけてくるようになったんです。それでお父様がすっかり
お怒りになっちゃって。まあ、魔王を倒さなければならぬという
根拠はそれだけではないんですが……。」

勇者「魔王ピイチャンに何があったんだ!つか、卑猥な写メ画像を
頼んでもいないのに先方から送ってくれるだなんて、むしろいい奴
のすることじゃないか!喜んでもらっとけよ!俺様にも送っていた
だきたいわい!!」

女神「(＊、ω、) 神界はセクハラにうるさいんです。卑猥
画像は全面禁止なのですっ!!」

勇者「Σ(一一)。D。」 エロ画像全て禁止だ……と……?ありえん

！！許すまじ、神界！！俺様に滅ぼしたいのは、むしろ神界のほうだ！！」

女神「い、い、い、(T▽T)い、い、い、話が途中から全部、卑猥な写メのことになってるんですけど……。」

ミイラじじい「アルテシア……それに神界ですとっ？では、あなた様はもしか、大神ゼース様のお子様18人の中の末娘、アルテシア様では……？」

女神「はい、その通りですが、私のことをご存知なのですか？」

勇者「(「」「」) ……ちょっと待てい。お前、今、18人兄弟だとか言わなかったか？」

女神「ええ、そうですけど。私には兄が7人、姉が10人おられますが、それが何か？」

勇者「(「」、口「」) 何か？じゃねえよ！エロ画像を全て禁止しておきながら、その子沢山っぷり！お前の親父、どんだけ夜に励んだんだよ！汚ねえぞ、権力者！！もう許せん！（どっかーん！…背景で火山が噴火）俺様、魔王討伐はもうヤメる！！今、この瞬間から魔王側に加担する所存！！」

ミイラじじい「アルテシア様は噂に違わずお美しいですのう。お姉さま方もきつと皆、お美しいのでしょうか。」

勇者「Σ(；・、・、) え？今、お姉さまとか言ったっ？そうかつ！すいません、嘘ですっ。俺様、さくつと魔王پیイチャンを討伐いたします！そして熟女のお姉さま方10人に、よってたかつ

て誉めていただきます。ぐふふふふ。（めくるめく夢の妄想タイムへ突入）」

女神「、、、（ $T \vee T$ ）、、、どうしてこんな、信念はないのに邪念はたっぷりの男が、世界を救う勇者なんでしょう……？」

ミイラじじい「おお、女神様と勇者様でしたか。素晴らしい……
……実は折り入ってお願いしたいことがあるのですじゃ！」

どうやら勇者ミナミンはムツチリ熟女が好ましい。
アルテシア（清楚スレンダー系）はミナミンのストライクゾーンからはまるつきり圏外のようなのである。

ところで、ミイラじじいの「お願い」とは一体何なのだろう？

続く。

9話「ミイラじじいをお願い。」

とりあえず店員の案内で、酒場の一番奥の個室に通された3人であった。

ミイラじじい「早速ですが、勇者様、ワシの願いというのは……」

勇者「♪(o, ∇,)／ (ピンポン★↑呼び鈴)注文お願いしまあす！えっとね、俺様、まず生ビールね。あと、たちポンと、ネギトロと、鮭のハラス焼きと、鶏のからあげとおく……」

女神「(ω, ;) すいません……おじいさん。この人、胃袋が満たされないと脳が働かないんです…。」

ミイラじじい「おっと失礼、これはワシが無粋でしたな。ここで出会えたのも、何かのご縁。ここのお代はワシが全てもちますゆえ、お二人とも遠慮せず飲み食いしてくださいませ。」

勇者「(目をキラキラさせて、ジジイの手をガシツと掴む)有難う、おじいさまっ！！刺身盛り合わせもお願いしていいっ？」

女神「ミナミン！さっきから肉や魚ばかりではないですか。野菜も頼みましょう。すいませくん、この大根サラダお願いしまあす。」

じきに、それぞれの飲み物が運ばれてくる。

勇者「じゃ、とりあえず、俺様の今後の健闘を祈って、カンパ―イ★」

女神「自分で自分の健闘を祈るっていう名目で、自分で乾杯の音頭をとる人を始めて見ました。」

勇者「（ビールを口に含みながら）……で？ じいさん、俺様たちに頼みって何よ？ 仲間にしてくれとか言うんなら、願い下げだぞ。魔王を討伐する勇者様のパーティには、ボインの女の子しか入れない決まりになっておるのだ。」

女神「Σ（「Д」；）　ちょっと！ いつから、そんな決まりが出来たんですかっ！」

ミイラじじい「ふひよひよひよ。いやいや、この老体で長旅はもう無理ですじゃ。願いというのは全く別のもの。」

勇者「それを聞いて安心したぜ。」

ミイラじじい「そういえば、まだ自己紹介もしておりませなんだな。実はワシ、魔王ピイチャンの守役を務めております、魔界の四大悪魔伯爵のうちの一人、ライーミというものでして。」

勇者ミナミン、飲んでたビールをブーツと噴射。

ミナミンの正面に座っていた悪魔伯爵ライーミ……めんどくさいな……いいや、ミイラじじいで……ミイラじじいはビールまみれとなった。

女神「（…；。；Д，。；。…）
 魔界の四大
 悪魔伯爵ううう？？？」

勇者「ΣΣ」「（―――、□、―――；；）」「L　おいしいiiiiiiii！
！めっちゃ敵じゃん―――！！乾杯してる場合じゃねえっつの！
！俺様達、まだばりばりレベル1なのに、いきなり最強四天王の一
人みたいなの出てきちゃってんよ、しかも近所の居酒屋で！！四天
王は四天王らしく、ラストダンジョンの通路の真ん中（一本道なの
で、回避不能）とかで、踏ん張ってるべき！！……ハッ……ちよつ
と待て、もしかしてこのビール、毒ッ？」

女神「（。D^o；≡；D^o） ええええっ？私、大根サラダ、もうつまんじやいました——！！！」

ミイラじじい「ふひょひょひょ。ご安心ください。年老いたとはいえ、このライーミ、四大悪魔伯爵の誇りがございます。毒殺などという、姑息な真似はいたしませんゆえ。」

女神「（＊ω＊）ほっ。そうですか。良かった。」

勇者「アル、何で敵を信用してホッとしてんだ！つか、四大悪魔伯爵様が、レベル1の俺様たちに何のご用なわけっ？断っておくけど、俺様たち金も実力も、アルに至っては胸もないんだぞっ！！」

女神「Ⅲ（Ⅰ。Ⅲ） 私の名前はアル、テ・シ・アです！ 気安く
ショートカットしないでッ！ それから、私の胸のことは放っておい
てくださいッ！！」

ミイラじじい「金も実力もおっぱいもいりませぬ。実はワシの頼みとは、勇者様と女神様に書いていただきたいものがあるのですじゃ。

┐

ついに判明！！アルテシアは実は貧乳だった！！（本筋にどうでもよさげな事項を重要視して、一番最初にもってくる）

それはともかく、いきなり登場した魔界の四大悪魔伯爵のうちの一人、ライーミ！！

彼が女神アルテシアと勇者ミナミンに書いて欲しいものとは一体ッ？次回、とっても急展開の予感！？

続く。

10話「神界v魔界の伝説！」

ミイラじじいはおもむろに白い紙と筆を懷から取り出し、アルテシアとミナミンの前に置いた。

ミイラじじい「女神アルテシア様と勇者ミナミン様に、ずばり！ワシが書いてもらいたいのは、我が主、魔王ピイチャンに対する、『挑戦状』ですぢゃ！！」

女神「魔王宛の挑戦状というと、『今からお前を倒しに行くぞ』とか、『巨悪許すまじ！』とか、そんな感じの文書のことでしょうか？」

ミイラじじい「はい。その通りでございますじゃ。」

勇者「w（△；）w 挑戦状？ なして、そげな面倒臭いものを！！」

ミイラじじい「その理由を話す前に確認しておきたいのですが、お二人は500年前に起こった、魔界と神界の大戦争のことを詳しくご存知ですか？」

勇者「（???） いんや。すっげえ、全く、これっぽっちも知りゃしねー。」

女神「……ミナミン……。これ、人間界では誰もが小学校で習うような、有名な伝説のはずなんですけど！」

勇者「この俺様を見くびらないでもらおう!!!俺様が小学校の授業で起きていたことなど、あるわけがないっ!!!（どーん）」

女神「見得をはらないでください。小学校だけじゃなく、中学校でも高校でも、起きてたことなんかないくせに。」

勇者「Σ(;;・、∩・´) いきなり鋭いツツコミをかましてきやがったな!!!フツ……成長したな、アル!!!胸以外のところが!!!」

女神「Ⅲ(。∩。Ⅲ) 胸のことはほっといてって、さっきから言ってるでしょうッ?」

ミイラじじい「(回想モード)……そう……今を遡ること、500年前……。先代の魔王アストロゼブ様率いる魔界軍、ゼース王率いる神界軍が、世界の命運を賭けて激突したのじゃった……!」

勇者「…*…・(∨´)……。…*…・ あっちゃん。ミイラじじい、勝手にノリノリで話し出しやがったよ。しかもこれ、何かこの物語の背景(今更)に関わる的な話っポイしい。うっわゝ絶対、話長くなりそーだゝ。めんどウザゝい。(おもむろにピンポーン★) すっいませゝん、焼酎と、フライドポテトと、軟骨のから揚げと、豚串追加でお願いしまゝす!」

女神「ミナミンったら、また肉ばかり頼んで。あ、私、このイチゴクレープというものが食べてみたいですゝ!」

ミイラじじい「それはそれは激しい戦いじゃった!!!勿論、その戦いには、ワシも参加しておったぞい!!!両雄は一步も引かず、魔王と大神の力がぶつかり合った影響で、海はうねり、空は荒れ狂い、

火山は次々と炎を噴き上げたのぢゃ!! 戦いは100日もの間続き…… (以下、ミイラじじいの大活躍物語が始まるが、長いので割愛)

勇者「Σ(口 111) げ。アル、お前、もう甘いもののいくの？ 目の前が甘くなって気色悪くなるから、頼んじゃ、めっ。」

女神「(TεT) えゝいいじゃないですかゝ! けちゝ!

ミイラじじい「……その時、ワシは咄嗟に敵の刃を交わし、我が究極の魔術をおみまいしてやつ…… (相変わらずミイラじじいの大活躍物語が続いているが、誰も聞きたくなさげなので省略)」

勇者「甘いのが欲しいなら、せめてホラ、このメニューに載ってる、梅酒サワーアイスってヤツにしろよ。こっちの方がアツサリしてそーだ。」

女神「まあ、梅酒サワーの上に、アイスクリームを乗せたオススメの一品ですって。美味しそうゝ。これにしようかなゝ♪」

ミイラじじい「こうして、イチゴクレープと、梅酒サワーアイスの戦いは佳境を迎え、梅酒サワーアイスの勝利に終わった……って、あれ？」

勇者「お・話終わった? あ、じいさんが話している間に、じいさんの分のつくねの追加、頼んどいたぜ。」

ミイラじじい「おお、これはかたじけない。……って、お前ら!! ワシの話を聞け————!!! (がっしゃゝん!!)」

女神「で、まあ、おじいさんの話を要約すると、神界と魔界の大戦争が500年前にあって、必然的に二つの世界の中間に位置していた人間界が戦場になっちゃったんです。迷惑した人間は、神界側に加担することになりました。で、神界と協力して、必殺兵器・聖剣エクスカリバーを作り、人間代表の勇者は聖剣を使って魔王を倒しましたとさ。めでたしめでたしっ。」

ミイラじじい「(ノTOT)ノ┐…・…・…・ト…・…・…・
ワシの熱弁を、あっさりまとめるな———!!」

勇者「チッ。結局、どうして俺様達が魔王に挑戦状をしたためなきゃならんのか、全然判明しないまま、次回へ持ち越しじゃないか！
！1話分、無駄にしゃがって！」

ミイラじじい「皿(。皿。皿) それはお前らのせいじゃああああ
—————!!」

そんなこんなで、だらりんちよの3人。
酔っ払いながら、世界の命運に関わるような、真面目な話をする方が間違っているのだっ!!

続くっ。

11話「ぐうたら魔王。」

女神「……で。おじいさん、どうして魔王さんに私たちが挑戦状を書く必要があるんでしょう？」

ミイラじじい「そのお話をする前に、我が魔界の王ピイチャンのお人柄と申しますか、悪魔柄についてご説明せねばなりません。」

勇者「、(@▽@)ノ 悪魔柄ってどんな柄？ しましま柄？ ぐるぐる柄？ アハハハハ、天井がぐるぐるしてる。」

女神「(―”―;) ミナミン、貴方、タダ酒だと思って飲みすぎです！」

ミイラじじい「先代の魔王であるアストロゼブ様は、持病の糖尿病が悪化してすっかり体調を崩されてな。今から30年ほど前に、先代の魔王は一人息子であらせられたピイチャンに、王位を譲ったのでございます。」

女神「まあ、糖尿病！ それは大変ですわね。私の父である神界の王者ースも高血圧とメタボで、先日お医者様に食べ過ぎ飲みすぎを注意されました。」

ミイラじじい「それはそれは。神王も魔王も、寄る年波には勝てませぬのう。」

勇者「ゞ(＊、∩＊)ノ”シ☆ 糖尿病の魔王とか、メタボで高血圧の神王とか、聞いたことねえっ！ の！ なんて生活習慣病丸出しなんだよ！ せめて韓ドラっぽく、体裁のいい白血病あたりをチョ

イスせんかい！つか、先代の魔王って、伝説の勇者に聖剣で斬り殺されたんじゃないのっ？何で糖尿病になるような齢まで、長生きしていらっしゃるわけっ？」

ミイラじじい「はあ。先代の魔王様は、斬られはしたものの、命には別状のない所を斬られましたのでな。」

女神「（＊、ω、＊） まあ、それはご無事で良かったですねえ。」

勇者「（「――」） 元魔王の無事を女神が喜んでどうする。アル、お前、自分が魔王を倒しに行く側の立場だっつーの、忘れてるだろう…。」

ミイラじじい「で、ですな。話は戻りますが、このピイチャンがまた、子供の頃からヤル気のない方でしてのう…。何も悪いことをしようとしないのですじゃ。毎日部屋にひき籠っては、人間界のゲームをしたり、漫画を読んだり、だらだらしているばかり。」

勇者「ニートだな！間違いない！それはニートだな！（キラーン）」

女神「あなたのお友達ですね、ミナミン。（冷たい目でミナミンを睨む）」

勇者「（「、口、」） ヲタニートと俺様を一緒にするな！俺は麻雀をしたり、パチンコをしたり、外出して金を稼いでいる！『アウトドア嗜好のプータロー★』だ！」

女神「いずれにせよ、全うな社会人として成り立っておらず、親に生活全般を頼っている点では、ピイチャンと同類ですっ。だいたい貴方のそのポジティブな思考の根拠はどこにあるんですかつ。」

ミイラじじい「で、見るに見かねたワシが、どうにか魔王ピイチャン様のケツを叩いて、神界に挑戦状やテロ予告などを出させて、実行させていたというわけですなのですが……」

勇者「アル、神界は何か魔王ピイチャンにテロられたわけ？」

女神「はい。神の城の外壁に『夜露死苦メカドック』と、スプレーでデカデカと落書きをされました。他にも、先ほど言いましたが、エロい画像を写メで送りつけてきたりとか。」

ミイラじじい「そのエロ画像にしても、ふんどし一丁でドヤ顔をしているピイチャン様自身のセクシーショットとか、ペットのスライムの交尾シーンとか、犬の肛門のどアップだとか、しわくちゃババアの入浴シーンの隠し撮りとかばかりなのです！」

勇者「どれもこれも、手近で無料ゲットできるエロレベルの低いものばかりではないか……！」

>i35185—4402<

ミイラじじい「こんなことでは、立派な悪とは言えませぬ……！……！……！
くうっ！（思わず溢れてきてしまった涙をぬぐう）」

勇者「（じじいと一緒に涙目になりながら）くうっ！いらぬ……！そんなエロ画像はいらぬうう……！ちゅーか、それエロ画像じゃないよ……！中2男子画像だよ……！しかもメカドック……！今更メカドック……！……！……！誰も知らんぞ、『よ○しくメカドック』な

んて古い番組!!」

女神「(両手をぱんっと合わせて)判りました!つまり、やる氣の出ない魔王ピイちゃんさんに、我々が挑戦状を出すことによって、ピイちゃんの闘志に火をつけ、魔王として正しいヤル氣を出してもらおうということですね!」

ミイラじじい「イエッス、その通りでございますちゃ——!!」
(万歳)」

女神「そういうことでしたら、お任せください!私、子供の頃から作文は得意ですの!これも人助け。困っている子羊を救うのは、女神としての勤めです。」

勇者「アル……お前、ひと良すぎ…。」

女神「(※、ω、※) まあ、そんな。誉めていただくことのことではございません。女神として当然のことですもの。」

勇者「いんや、これっぽっちも誉めちゃいねえけどな。(呆) 挑戦状を書いて、ピイちゃんがやる氣を出すと困るのは、俺様達の方だと思うんだが…。まあ、アルがそれでいいなら、俺様的にはどうでもいいけど。」

ミイラじじい「では、書いていただけるのですなっ!」

女神「勿論です!(どーん)」

こうして女神アルテシアと、勇者ミナミンは、魔王ピイチャンに挑戦状をしたためることになった。

二人は一体、魔王にどんな挑戦文を叩きつけるのであろうか？

続く。

11話「ぐうたら魔王。」（後書き）

【どうでもいい注釈】

「よろし〇メカドック」

大昔、某海賊マークの週間少年誌に掲載されていた漫画。全12巻。大雑把な内容としては、自分で整備した車が、頑張って走っている。以上。（大雑把すぎ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3456y/>

ふあいなるクエスト！

2011年11月18日04時54分発行